

## 19 世紀中葉フランスにおける名所図会の受容—フランスのコレクションを通して—

ヴェロニク・ベランジェ

### はじめに

本発表は、1840 年代から 1890 年代にかけて日本や日仏関係を揺るがした変動期の只中に焦点を当てる。以前すでにフランス国立図書館写本部門のスミス・ルスエフ・コレクションに関して研究を行ったが、その中で名所図会はフランスの数あるコレクションの中でもかなりの量を占めることが分かった。これは単に市場の状況を反映したものなのか、これらの作品はその所有者らによって何か特別の目的で使用されたのか、という疑問を軸にした最初の研究では、日本研究協会 (Société des études japonaises) における名所図会の受容の経緯を明らかにしたが<sup>1</sup>、本論ではさらにこれが他の人々にはどのように受け入れられたかをみていきたいと思う。

ここでは 19 世紀フランスの日本美術愛好家らによる名所図会の受容の歴史をみていくが、単に類型学的に名所図会への評価を考察するだけでなく、こうした評価の条件、そして名所図会が果たした役割を検討し、そこから出版界や歴史学の成立など、フランスでの名所図会の受容の背景とその進展を見て行くことになる。

また一方で、挿絵の豊富な名所図会は日本の文化表象に影響を及ぼした。浮世絵の色鮮やかな世界とは異質のこうした書物によって得られた情報が、どのようにフランス人の間に普及し、またどのように日本の新しいイメージを形成したかが問題となる。

そして最後に、これらの資料の物理的側面に着目したい。名所図会は日本の書物の流通という非常に特殊なネットワークで広まったものである。そこで、フランスにおける名所図会の発見の経緯を辿りつつ、同時にフランスの名所図会コレクションが段階的に発展していった様子を明らかにしたい。そこには 19 世紀の美術品収集家の趣向が読み取れるはずである。

発表を始めるにあたり、まず最初に名所図会の特徴について簡単に説明したい<sup>2</sup>。このジャンルは、過去への好奇心の高まり、地方史に関する研究の発展、百科事典や辞書のような教育的な内容をもつ「図会物」の多様化といった、18 世紀末の日本の出版界の動向の中で生まれたものである。名所図会は当初、各地にまつわる文学、絵画の伝統を下敷きにしつつ、忠実な描写を目指して考案され、文章に関しては作者の個人的考察を入れない、実在する資料を徹底的に編纂したものであった。それまでの出版物にない新

しさは、挿絵の存在である。絵画の様々な伝統から汲み取られた豊富な図像、そして参考文献の豊富な目録という形態をとった文章によって、名所図会はヨーロッパにおけるその受容について研究するうえで、複合的な研究対象となっているのである。

### 1. シーボルト・コレクションの中の名所図会：貴重な民族誌資料

ヨーロッパ人の名所図会に対する関心は、いつごろから見られるであろうか。西洋の出版物の中で最初に名所図会について言及がなされたのは、フィリップ＝フランツ・フォン・シーボルト (1799-1866) のコレクション目録の中である<sup>3</sup>。これは、シーボルトのために多くの日本学研究を行った言語学者ヨハン＝ヨゼフ・ホフマン (1805-1878) によって 1845 年に編纂されたものである。例えばユリウス・クラブロート (1783-1835) のコレクション目録には<sup>4</sup>、1839 年に中国の地方地誌 (方誌) については述べられているが、そこから影響を受けたとされる名所図会に関しての言及は見られない。

シーボルトの目録、及び 1832 年から 1851 年にかけてシーボルトが出版した『Nippon』<sup>5</sup>の中で名所図会が参照されたということは、これが日本史研究家にとって基本的な研究ツールとして定義されたということである。したがって、シーボルトによる名所図会の利用方法を知れば、後の日本美術愛好家らが文章の中で名所図会を拠り所とすることにも納得がいくはずである。中でもフランスで最初の日本語教師であったレオン・ド・ロニー (1837-1914) は、自らの参考文献目録を作成する際、名所図会を参照している。

1845 年の目録には、オランダ領東インド陸軍付きの医師であったドイツ人医師シーボルトの、1823 年から 1829 年にかけての最初の日本滞在の際に集められたシーボルト・コレクションの構成が仔細に記されている。シーボルトの来日の目的、そして公の使命は、日本の民族誌に関する情報を収集することであった。こうした理由で、日本の産業や風習を調査する手がかりとなる書物や美術品など、あらゆる分野にわたる資料を集めることになる。シーボルトの目録には 525 点の品が含まれるが、そのうち名所図会は 11 点である。この目録の非常に細かい分類法は興味深く、名所図会は第 2 部「歴史および地理書」に属し、地方の名所図会はその中で「歴史・地理」に分類されている一方、都の名所図会は「地形」に区分されている。ここで着目したのは、名所図会が一つのジャンルとして認識されているということ、そしてこれらの書物の科学的側面が強調されており、絵本のようなものとは別に分類されているということである。これらの書物は、おそらく 1826 年のシーボルト

トの江戸滞在の折に、彼の生徒たちの仲介で手に入れたものと考えられ、そのことは『Nippon』の1897年版の中に書かれている『播州名所巡覧図会』についての挿話に記されている<sup>6</sup>。『木曾路名所図会』以外、収集された名所図会のタイトルはシーボルトの辿った経路を示している<sup>7</sup>。収集は1859年から1862年にかけてのシーボルトの2度目の来日の際に完成され<sup>8</sup>、その時に1835年刊の有名な『江戸名所図会』が追加された。

いくつかの名所図会は、日本についての研究資料としてシーボルトと彼の協力者らによって使われた。開国前の日本についての知識の大全、『Nippon：日本記述史料集（*Nippon：Archiv zur Beschreibung von Japan*）』は、西洋人の大きな関心の的であった日本の地理に関する章（「日本の数理・自然地理学」）から始まっている。シーボルトは地理に関する日本の文献を紹介しながら、日本の地理が膨大な研究分野であることを興奮気味に述べている<sup>9</sup>。この中で彼は、ホフマンの編纂した目録の中からいくつか作品を取り上げ、短い分析を加えているが、名所図会については一段落を割き、その資料の豊富さ、挿絵の質の良さについて言及し、例として『大和名所図会』と『東海道名所図会』を挙げている<sup>10</sup>。しかし『Nippon』の中では、はっきりと名所図会に準拠した箇所は少ない。歴史上のシーンや古代の美術品を紹介する挿絵は、『紀伊名所図会』、『播州名所巡覧図会』<sup>11</sup>、そして『河内名所図会』<sup>12</sup>から引用されているが、これらの章はシーボルトの生徒らが書いた随筆の翻訳であり、彼らはここでは研究資料としての名所図会を初めて紹介した人物たちであったということに留意したい<sup>13</sup>。

シーボルトの生徒や協力者によって集められた資料を全体的に調べてみると、名所図会が使われた分野が非常に多岐に渡るということが窺える。実際シーボルトが参考にした資料には、図像学的資料という名目で多くの名所図会が暗黙的に引用されている。彼は名所絵図から借用した都市の眺望、生活の様子を模写させたが、そのひとつが、谷文晁の描いた『名山図会』を基に画家川原慶賀が描いた、日本の有名な山の絵の模写である（図1-2）<sup>14</sup>。慶賀は、科学的な正確さを出すために西洋的な手法でもって文晁の真景図を描きなおした。また名所図会を基に人々の暮らしの様子を描いた絵も再現したが<sup>15</sup>、そこに表れる地方の特色はすべて消滅してしまっている（図3-4）。

そしてホフマンも翻訳の中で、例えば『仏像図彙』の「吉野蔵王権現」の解説の翻訳などで、名所図会を地名事典として利用したということが分かっている<sup>16</sup>。

シーボルトの研究はしたがって、名所図会の重要性を最初に強調したものであり、以後外交においても日本について真の知識の道具として利用されるようになるのである。

## 11. 開国：日本を知るための道具、名所図会

シーボルトの日本での使命には、当然外交的な意味合いも含まれていた。それは、オランダと日本の通商関係を改善すべく情報収集をし、またシーボルトが1863年にナポレオン三世へ宛てた公開状の中にも記してあるように、「商業的開拓」を行うことであった。

フランス国立図書館の写本部門コレクションに、1850年代から1860年代にかけて日本との間に確立された関係に見られる学術的かつ商業的な要素を併せ持つものがある。1843年にデュプラ書店よりシーボルトコレクションの他の複製本と共に購入された『日本山海名産図会』である（図5）<sup>17</sup>。シーボルトはカタログの序章で、これらの本はフランスで日本学を発展させるために、中国学者スタニスラス・ジュリアン（1797-1873）に差し向けたものであることを明言している。これはフランスの公のコレクションに加わった最初の名所図会であり、その出所がシーボルト・コレクションであるというのは意味深い。国立図書館に次の名所図会が入るのは1890年以降である。

『日本山海名産図会』はそれ自体非常に興味深いものである。この中で陶器について記述された箇所は、スタニスラス・ジュリアンの依頼を受けてヨゼフ・ホフマンが翻訳し、1856年に出版されている<sup>18</sup>。ホフマンは「この壮大なコレクションの中でも、この作品は最も貴重なものの一つである。今日まで外国人旅行者は誰一人として入り込めなかった地方で花開き、我々の知ることのなかった日本産業の最も重要な分野についての情報を与えてくれるものだからだ」<sup>19</sup>と述べている。翻訳者ホフマンにとっては、ヨーロッパの人々に、そして誰より陶器製造者に、日本の産業の知られざる秘密を知らせることが目的であった。スタニスラス・ジュリアンは実際フランス政府より、「化学に関する中国人のすべての産業技術の翻訳」を依頼されていたが、それは当然のことながらこの分野で他国と競争するためであった。この特殊な名所図会に関しては、日本の開国に関係した国際的な背景に着目しなければならない。のちにレオン・ド・ロニーは、「政治、通商において具体的利益を得るために、これまで学問的な動機でのみ学ばれてきた日本語の習得は、不可欠なものになった」<sup>20</sup>と述べている。

名所図会はまた、その時代の日本を知るための道具として、外交上にも利用された。1864年にナポレオン三世より王立図書館に寄贈された二点の名所図会は、おそらくフランスか日本の外交官のもたらしたものと考えられているが、非常に多くの注釈が記されており、当時の日本の歴史、地理への深い関心を示している（図6）。

他の例として、1867年の万国博覧会への名所図会の公式出展が挙げられる<sup>21</sup>。これには出版されたほとんどすべて

の名所図会が網羅されており、幕府の支配の下で地方ごとに組織される日本の実情が紹介されている。展示された作品は、翌年1868年の明治維新の後で売却され散り散りになったが、東洋言語学校図書館の『河内名所図会』のように、フランスのコレクションがその足跡を把握していたのは、非常に象徴的なことである（図7）。

こうした第一段階は、ヨーロッパと日本の交易の始まりを表すものである。名所図会は、それが内包する情報のために利用され、外国の勢力に対し日本国家を代弁するものとなった。個人のレベルでも、最初は外交官、次いで旅行家たちが、しだいにこれらの書物に興味を抱くようになり、新しい視点が注がれるようになるのである。

### III. 『江戸名所図会』、旅行家たち夢を支えたもの

大きくて高価な名所図会は携帯用の案内書にはならなかったが、ヨーロッパ人にとっては非常に重要な、現実の旅の代わりとしての機能を有していた。日本の開国が段階的に進められる中、欧米諸国との間に締結された条約は外国人の渡航を制限し、外交官だけが、ヒューブナー男爵の言葉を借りればこの「禁じられた土地」に行くことができたのである。

開国に伴う日本への強い関心は、様々な出版物によりさらに大きくなった。外交上の出来事を伝えるもの、あるいはこの知られざる国の生活の様子を描き出す書物など、その多くが挿絵付きのもので広く普及し、浮世絵や挿絵本はこのような背景の中で重要な役割を担い続けた。こうして名所図会も、日本の現実を伝えることに一役買うことになった。

1863年から1864年までスイスの遣日使節団長として横浜に派遣されたエメ・アンペール(1819-1900)は、雑誌「ル・トゥール・ド・モンド (*le Tour du Monde*)」誌に日本滞在の様子を多くの挿絵とともに掲載した。この記事は『絵で見る日本 (*Japon illustré*)』という暗示的なタイトルで単行本として後に出版される<sup>22</sup>。この中で、江戸は内容の半分近くを占めているが、実際1860年代半ばの江戸は非常に魅惑的な都市であった。「日本政府の気難しい政策に難点はあるが、良く言えば、研究分野への関心に神秘の魅力、克服すべき困難さへ立ち向かう情熱を与えてくれ、結果的にはこの政治も探求精神を大いに刺激してくれるものなのだ。」<sup>23</sup>とアンペールは述べている。

アンペールは著書に日本の版画を多く引用し、絵本の挿絵は日本文明の秘密を解き明かし、言語の壁や日本固有の暗黙の文化といった壁を越えさせてくれるものであるという、当時広く普及していた考えを擁護した。

彼はまた『江戸名所図会』という原題には決して言及す

ることなく、読者に長谷川雪旦(1778-1843)の版画を西洋的表現へ翻訳してみせた<sup>24</sup>。いくつか有名な絵を見てみると、場面の写実的な描写、陰影、投射影、空の様子の詳細な描出、あるいは装飾的な雲の排除といった、西洋風への描き換えの法則が見えてくる。また画家らによって付け足される要素もあり、異国情緒や絵画的趣向が加味された(図8-11)。

その絵画的な美しさが失われつつあることを、その数年後の1871年に日本を訪れた美術評論家のテオドール・デュレ(1838-1927)は嘆き、江戸では廃墟となった大名屋敷の荒廃した様子に遺憾を表している。開国してわずか数年、「本物の日本」は外国人の目には遠いものになりつつあった。「古き良き日本、日本的な日本は失われつつあり、25年後にはヨーロッパから来た人々は、もうそうした姿を探しても無駄であろう…」と彼は記している<sup>25</sup>。いくつもの革命を経験した時代に生き、フランス革命が中世の美術遺産を破壊したことを認識していたデュレは、江戸文明に対してもロマン主義的な視線を注いだようである。

旅行家としての眼差しに答えるように、美術評論家としてデュレは1882年に名所図会、特に『江戸名所図会』を詳しく分析している。彼は名所図会の豊富さと、日本人にとってのその重要性に着目している。デュレは鳥瞰図に見られる地形的な側面よりも人々の生活の様子に関心を示しており、その意味で『江戸名所図会』は彼にとって「名所図会の中で最も完璧な作品である」としている。また、「これは今世紀前半の日本人の生態を如実に描いた絵であり、今後これが描かれた時代が遠ざかり、昔の習慣は本や絵によってしか知ることができなくなるという点で、この作品はこれからさらに関心の高いものとあるであろう。」<sup>26</sup>と述べ、将来の世代に果たすであろうその重要な役割についても強調している。

デュレの言う過去の証言、古い習慣の記憶としての名所図会の機能は、1870年代から1880年代にかけて日本史及び日本美術考古学の基礎が築かれる中で、その意義が認識されていく。

### IV. 美術品収集家と知識人：考古学と日本美術史学の構築

テオドール・デュレとアンリ・チェルヌスキ(1821-1896)、そして後にエミール・ギメ(1836-1918)は、それぞれ日本旅行から多くの絵本を持ち帰り、その中には名所図会の名の付くものもいくつかあった。これらの書物は知識人や美術史家に使用されるようになり、彼らにとって貴重な資料となった。

こうして1873年の国際東洋学会議で、レオン・ド・ロニーは名所図会というジャンルに対する体系的な研究を呼

びかけ、東洋言語学校図書館にあった『河内名所図会』の一節を翻訳し紹介した(図12)<sup>27</sup>。これは1867年の万博の後に入手されたばかりのもので、フランスの知識人らに新しい原資料を与えたこの万博の重要性を十分に物語っている。

この会議の際、日本考古学の方法論を確立しようと試みたロニーは、「厳密な日本考古学研究の出発点として、一つは歴史資料の考証(…)、もう一つは長い民族形成の過程の証言ともなる美術品の分類がある。」<sup>28</sup>と述べている。彼は考古学を、歴史資料の分析と美術品の分析という二重の分析の結合と捉えたのであり、名所図会のような資料にあたることは、こうした方法論の実例であるといえる。こうしてロニーは名所図会の中からいくつかの箇所を訳して日本の地理を知る上での索引とし、またそこに描かれている品を分析したのであった(図13)。

この国際東洋学会会議に出席したメンバーには、アンリ・チェルヌスキやフィリップ・ビュルティエ(1830-1890)といったジャポニズムに関係する重要な人物の名前が見受けられる。ビュルティエは多くの名所図会を収集し、それらは1891年に出版された目録<sup>29</sup>に詳細が載せられている。『ジャポニズム』という名を初めてタイトルに冠した1874年の論文の中で、ビュルティエはフランスに『厳島図会』と『厳島絵馬鑑』を紹介している。日本の生活風景と厳島神社の宝庫から来た絵馬を描写し、ここにも日本の生活の生き生きとした描出、かつ日本の考古学的、芸術的遺産の調査という名所図会の二重の機能が見出される。

美術史家ルイ・ゴンズ(1846-1921)も著書の中で同じ作品に言及している。彼がコレクションの中に所有している『厳島絵馬鑑』全5巻は、1883年の日本版画展<sup>30</sup>では見過ごされたが、モンテフィオーレ・コレクションの『厳島図会』については、同じ年に出版された著書『日本美術』でゴンズは称賛し、「名所図会というジャンルにおいて最も興味深く、最も重要な作品である(…)これには、漆器と金属製品の歴史についての多くの情報が含まれている。」<sup>31</sup>と述べ、『厳島図会』が、ゴンズにとって他の美術品への足がかりとなったことが窺える。

ゴンズの『日本美術』において、名所図会から引用された挿絵は二種類に分けられる。ひとつは『厳島図会』に描かれた美術工芸品(能面 図14-15、刀など)と、もうひとつはそうした品々の使用法を読者に説明する民族誌的な資料の役割を果たす、主に『都名所図会』と『江戸名所図会』から引用された生活風景の絵である(図16-17)。ここで、ゴンズが著書の中で『江戸名所図会』から引用し「日本の考古学者」<sup>32</sup>と題した絵と、ロニーが国際東洋学会で紹介した、河内での考古学調査を描いた絵<sup>33</sup>を関連付けて考えるのは妥当であろう(図18-19)。ゴンズは名所図会

の中に、自分が著書の中で使った方法を見出し、そして方法論に関する章の冒頭にこの「日本の考古学者」の挿絵を付したということは着目すべき点である。名所図会によって、ゴンズは当時パリの市場では手に入らなかった古い時代の美術工芸品を紹介することができたのだが、当然ここがゴンズの著書の限界でもあった。美術工芸品の分析に対する彼の重視は、フランスにおける考古学の見直しという背景に根ざしたものであった。古文書学校の聴講生だったゴンズは、素材という観点からの美術工芸品の考古学的分析を推奨する当時の教育に啓発され、考古学を歴史の補助技術のようにみなしていたのである。

最後に、1890年にエコール・デ・ボサール(美術学校)で行われた大規模な日本の版画展についても触れなければならない。これは主に浮世絵が中心となった展覧会であったが、一部挿絵本も紹介された。1889年にパリに開館したばかりのギメ美術館より貸し出された、『河内名所図会』、『名山図会』、『成田名所図会』、『拾遺都名所図会』の計4点の名所図会が、展覧会カタログの最後に紹介されている。ギメ美術館に所蔵される『拾遺都名所図会』には、「祇園会」という挿絵のページにラベルが付しており、この絵が展示に選ばれたということを示している(20)。この展覧会、特にこれらの名所図会の紹介が、どのような影響を与えたのか、どのような目的で名所図会が展覧会に加えられたのか。この展覧会に関する文書もカタログの序章も、名所図会については触れていないため、それを知るのは困難である。

## V. 結論

名所図会が得た評判から窺える、江戸時代末期の日本を開拓しようとする日本人の知識欲、そして過去への大きな好奇心は、約2世紀もの間鎖国していた日本という国に対するヨーロッパ人たちの好奇心と共鳴するものがあつた。広く普及したシーボルトの『Nippon』によって明らかにされることとなった名所図会は、19世紀後半の美術品収集家や知識人たちの知られるところとなり、日本への最初の旅行者らが手に入れた名所図会は、パリの美術品愛好家らに収集される。それらから引用された挿絵は日本についての書物に載って普及し、19世紀末に開催されるようになる大きな日本美術展で紹介されるようになった。しかし当然、美術品としての本の質が名所図会を選択するうえで一番重要な基準ではなく、主な関心は何よりその内容、資料としての価値であつた。

名所図会の利用の仕方は、百科事典的なその内容、全体の構成に関わる作者や絵師の多様さを繁栄して、非常に様々であつた。

日本の現状を描いた西洋風の絵の中に、暗に名所図会を

参考にした形跡を少なからず見出すことができる。名所図会は旅行家らにとって、その分かりやすいタイトルのおかげで、訪れた土地の歴史を、絵によって文化的観点から把握させてくれるものであった。そして、挿絵の正確さは名所図会に真実性を与え、美術工芸品に関する研究を保証してくれるものであり、よって名所図会は堂々と参照される文献となった。一方名所図会の文章そのものについては、ホフマンの翻訳を除いては、研究者らにあまり扱われなかった。しかし、明治時代初頭に大々的に行われた調査により、名所図会を越える、日本美術史の構築のための新しい資料がもたらされることになるのである。

<sup>1</sup> BERANGER (Véronique), « Les recueils illustrés de lieux célèbres (*meisho zue*), objets de collection. Leur réception dans les milieux de la Société des études japonaises à travers l'exemple de la collection d'Auguste Lesouëf (1829-1906) », *Ebisu*, n°29, automne-hiver 2002.

<sup>2</sup> FIÉVÉ (Nicolas), « Le récit sur les hauts lieux de la capitale. Essai sur le rôle du *meisho* dans la constitution d'une ville-mémoire », *Japon pluriel*, Actes du premier colloque de la Société française des études japonaises (Saint-Germain-en-Laye et Paris, 16-17 décembre 1994), Paris, Picquier, 1995, p. 305-317.

<sup>3</sup> *Catalogus librorum et manuscriptorum japonicorum a Ph. Fr. de Siebold collectorum, annexa enumeratione illorum qui in museo regio Hagano servantur, auctore Ph. Fr. de Siebold. Libros descripsit J. Hoffmann....* - Lugduni Batavorum : apud auctorem, 1845. 「シーボルト蒐集日本図書目録・並びにへーぐ王立博物館所蔵日本書籍及び手稿目録」、『シーボルト「日本」の研究と解説』、東京、講談社、1977、41-58頁。

<sup>4</sup> *Catalogue des Livres imprimés, des manuscrits et des ouvrages chinois, tartares, japonais, etc. composant la bibliothèque de feu M. Klapproth*. Paris, R. Merlin, 1839.

<sup>5</sup> SIEBOLD (Philipp Franz von) : *Nippon, Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern : Jezu mit den südlichen Kurilen, Krafto, Koorai und den Liu Kiu Inseln, nach japanischen und europäischen Schriften....* - Leyden : bei dem Verfasser, 1832.

<sup>6</sup> SIEBOLD (Philipp Franz von) : *Nippon, Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern : Jezu mit den südlichen Kurilen, Sachalin, Koorai und den Liukiu Inseln*, von Ph. Fr. von Siebold, herausgegeben von seinen Söhnen [Alexander Freiherr von Siebold und Heinrich Freiherr von Siebold]. 2te Ausflage. - Würzburg : L. Woerl, 1897. p. 152.

<sup>7</sup> 播磨、機内 (大和、都、河内、和泉、摂津)、紀伊、近江、東海道。

<sup>8</sup> British Library, München Staatliches Museum für Völkerkunde. 藤田 喜六, 「大英博物館・大英図書館所蔵「フォン・シーボルト・コレクション」」、『シーボルト「日本」の研究と解説』、東京、講談社、1977、59-81頁。KRAFT (Eva), *Japanische handschriften und traditionelle Drucke aus der Zeit vor 1868 in München*. Stuttgart,

Franz Steiner Verlag Wiesbaden, 1986.

<sup>9</sup> Siebold (Philipp Franz von) : *Nippon*, 1832. vol. I, p. 141.

<sup>10</sup> « Die historisch-geographischen Bücher enthalten mehrenteils Beschreibungen einzelner Provinzen, in chorographisch-statistischer, archäologischer, geschichtlicher und naturhistorischer Hinsicht ; einige sind nach Art von Reisebeschreibungen verfasst, worin die Reiserouten und Merkwürdigkeiten, welchen man begegnet, ausführlich beschrieben und mit manigfaltigen, oft sehr guten Holschnitten illustriert sind. Als Probe der erstern Art ist eine Beschreibung von *Jamato* in 7 Bänden, und ein Reisebuch längs der grossen Landstrasse von *Mijako* nach *Jedo* in 8 Bänden zu nennen. Solche Bücher bestehen fast von allen Provinzen des Reiches und allen besuchten Wegen ». Siebold (Philipp Franz von) : *Nippon*, 1832. vol. I, p. 141-142.

<sup>11</sup> *Nippon* III, tab. II : « Zin-mu-Ten-woo op Zynen Zeetogt Van Kibi naar Naniha » : 播州名所巡覧図会 (文化一) 巻の一. *Nippon* III, tab. III : « Zin-mu-Ten-woo landt op Kii » : 紀伊名所図会 (文化九) 初編 巻の一の上 神武天皇、名艸戸畔(なくさとべ)を征ちしたまふ所。

<sup>12</sup> Siebold (Philipp Franz von) : *Nippon*, 1832. vol. III « Magatama ».

<sup>13</sup> 斎藤 忠, 「勾玉に関する記述」、『シーボルト「日本」の研究と解説』、東京、講談社、1977、168-171頁。箭内 健次, 「シーボルト『日本誌』編纂過程」、『シーボルト「日本」の研究と解説』、東京、講談社、1977、30-39頁。

<sup>14</sup> 福井英俊, 『日本』の出版過程と其扇・いね宛シーボルト書簡 — ブランデンシュタイン=ツエッペリン家資料に見る。『新・シーボルト研究 II』、東京、八坂書房、2003、291-304頁。

<sup>15</sup> 永松 実 「川原慶賀と弟子の作品について」、『秘蔵浮世絵大観・パリ国立図書館』、東京、講談社、1989。

<sup>16</sup> *Nippon* V, tab. XXIII, 248 : 吉野蔵王権現. *Nippon* V, tab. XXIV : 不動八大童子. 末木 文美彦, 「シーボルト・ホフマンと日本宗教」、『季刊日本思想史』1999、26-42頁 ; FRANK, Bernard, *Le Panthéon bouddhique au Japon : collections d'Emile Guimet*, Paris : RMN, 1991.

<sup>17</sup> « San kai mei san dzu je 503. Beschreibung und Abbildung der vorzüglichsten Land- und See-Produkte. Im 5. Bande befindet sich unter der Rubrike « Jaki mono » eine Anweisung der Porzellan Verfertigen. V. Siebold".

<sup>18</sup> HOFFMANN (Johan Joseph), « Mémoire sur les principales fabriques de porcelaine au Japon », [tiré du *Sankai meisán zue*], dans Stanislas Julien, *Histoire et fabrication de la porcelaine chinoise, traduit du chinois par Stanislas Julien*, Paris, 1856, p. 275-296.

<sup>19</sup> *Ibid.* p. 277.

<sup>20</sup> [L. de Rosny], *Le Lotus*, n°1, janvier-février 1873, p. 3-4.

<sup>21</sup> 『明治期万国博覧会美術品出品目録』、東京、東京国立文化財研究所、1997、9頁。

<sup>22</sup> HUMBERT (Aimé), *Le Japon illustré*. Paris, Hachette, 1870.

<sup>23</sup> Aime Humbert, *Le Japon illustré*. Paris, Hachette, 1870, tome I, p. 303 (chapitre XXII, les légations, le

---

Tjoôdji (長応寺))

<sup>24</sup> 岡田章雄 「アンペール「日本図誌」について」、『浮世絵芸術』20, 1968, 15-19 頁。

<sup>25</sup> Th. Duret, *Voyage en Asie. Le Japon. la Chine. La Mongolie. Java. Ceylan. L'Inde.*, Paris, Michel Levy Frères, 1874, p. 34, 37.

<sup>26</sup> Th. Duret, « L'Art japonais. Les livres illustrés – les albums imprimés – Hokousai », *Gazette des Beaux-Arts*, t. 26, 1882, p. 300-318.

<sup>27</sup> Léon de Rosny, *Congrès international des Orientalistes : compte-rendu de la première session. Paris, 1873*. Paris, Maisonneuve, 1874, p. 77-78

<sup>28</sup> L. de Rosny, « Sur les plus anciens monuments de la civilisation japonaise », *Congrès international des Orientalistes : compte-rendu de la première session. Paris, 1873*. Paris, Maisonneuve, 1874, p. 63

<sup>29</sup> *Collection Philippe Burty. Catalogue de peintures et d'estampes japonaises, de kakemono, de miniatures indo-persanes et de livres relatifs à l'orient et au Japon*, Paris, Leroux, 1891.

<sup>30</sup> GONSE (Louis), *Catalogue de l'exposition rétrospective de l'art japonais organisée par M. Louis Gonse, Directeur de la Gazette des Beaux-Arts*. Paris, Quantin, 1883.

<sup>31</sup> Louis Gonse, *L'art japonais*, 1883, tome II, p. 76 note 1.

<sup>32</sup> Louis Gonse, *L'art japonais*, 1883, tome I, p. 155.

<sup>33</sup> 河内名所図会 卷之五 千塚 高安郡の山里、郡川のほとりは、千塚とて太古の窟多し。

(翻訳・梶浦 彩子(翻訳者))

## 図版

### ILLUSTRATIONS



1. 箱根峠 (『日本』第一巻 図一)

1. *Nippon I*, tab. II. Hakone-Tôge



3. 团扇屋 (絹布版画、川原慶賀)

3. Peinture sur soie

[Bibliothèque nationale de France. Dpt des manuscrits. Smith-Lesouëf japonais 253]. N°18: Marchand d'éventails plats (*uchiwa* 团扇屋). Attribuée à l'atelier de Kawahara Keiga 川原慶賀。



2. 笥根嶺 (『名山図会』(文化九)地の巻)

2. *Meizan zue* (1812)

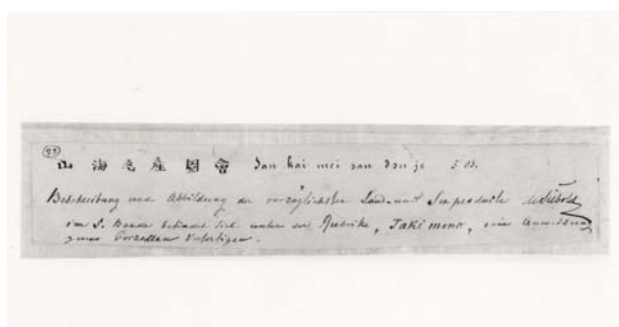


4. 深草の里 团扇屋 (『拾遺都名所図会』(天明七)巻の四)

4. *Shûi Miyako meisho zue* (1787)

cf. 『秘蔵浮世絵大観・パリ国立図書館』 講談社, 1989, p. 250

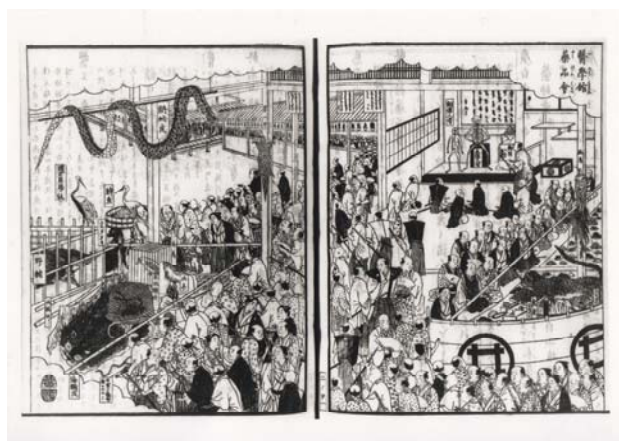




5. 『日本山海名産図会』

5. *Nippon sankai meisan zue*

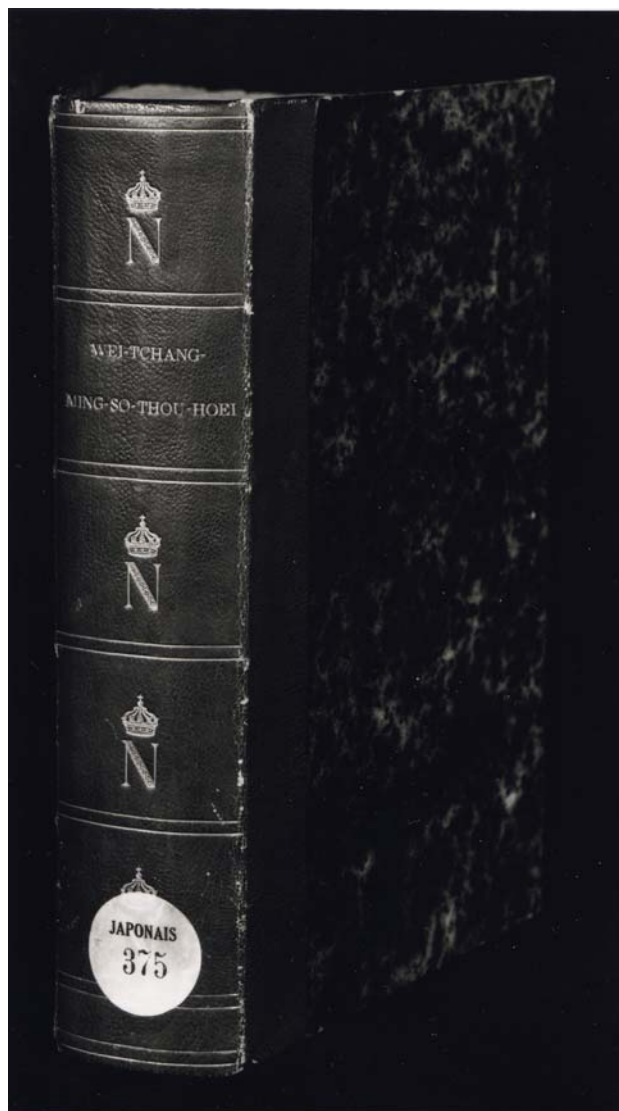
[Bibliothèque nationale de France. Dpt des manuscrits. Japonais 305]. Note manuscrite.



6-1. 医学館薬品会 (『尾張名所図会』(天保十五) 卷之二)

6-1. *Owari meissho zue* t. 2 (1844)

[Bibliothèque nationale de France. Dpt des manuscrits. Japonais 375]. Dos et note manuscrite « grand cabinet d'histoire naturelle ».



6-2. 見返し

6-2. Mikaeshi





7. 『河内名所図会』(享和元年) 見返し

7. *Kawachi meisho zue* (1801)

[Bibliothèque interuniversitaire des Langues orientales.  
AF Japonais 16]. *Mikaeshi*



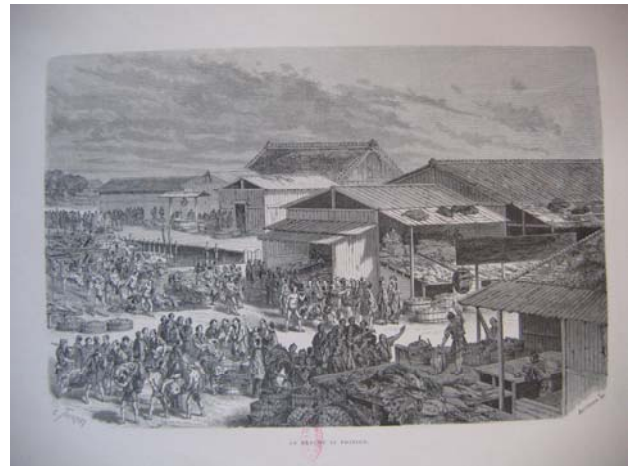
9. 錦絵 (『江戸名所図会』(天保五-七) 巻之一)

9. *Edo meisho zue* (1834-36)



8. 江戸 (A. アンペール『幕末日本図絵』2巻5編)

8. A. Humbert, *Le Japon illustré*. Paris, Hachette, 1870,  
vol. 2, livre V «Yédo», les arrondissements de l'Est,  
dans le Soto-siro. Ch. XXIX: la cité bourgeoise. Pl. 2  
(p. 5): «une librairie à Yédo», dessin de L. Crépon  
d'après des gravures japonaises.



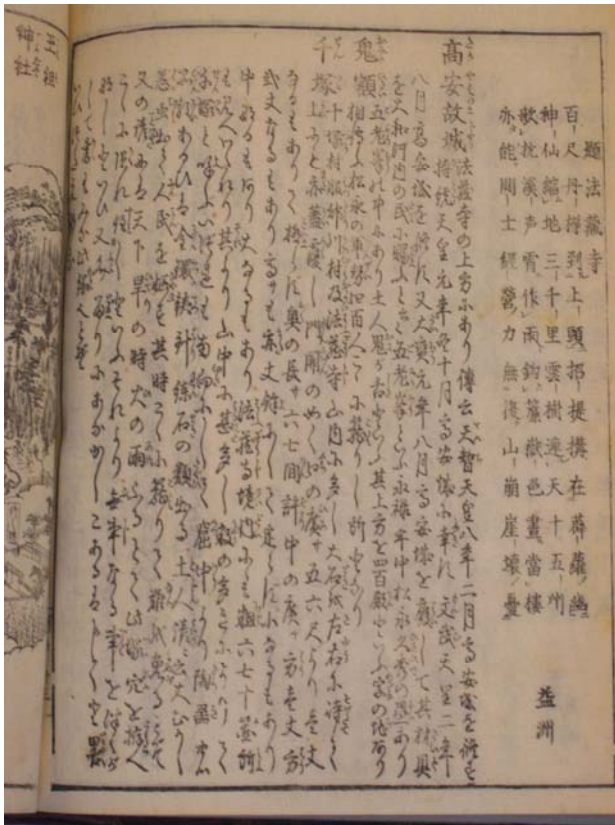
10. 魚市 (前出 A. アンペール『幕末日本図絵』)

10. A. Humbert, *Le Japon illustré*. Ibid. Pl. 8 (p. 13):  
«le marché au poisson», dessin de E. Thérond d'après  
des gravures japonaises.



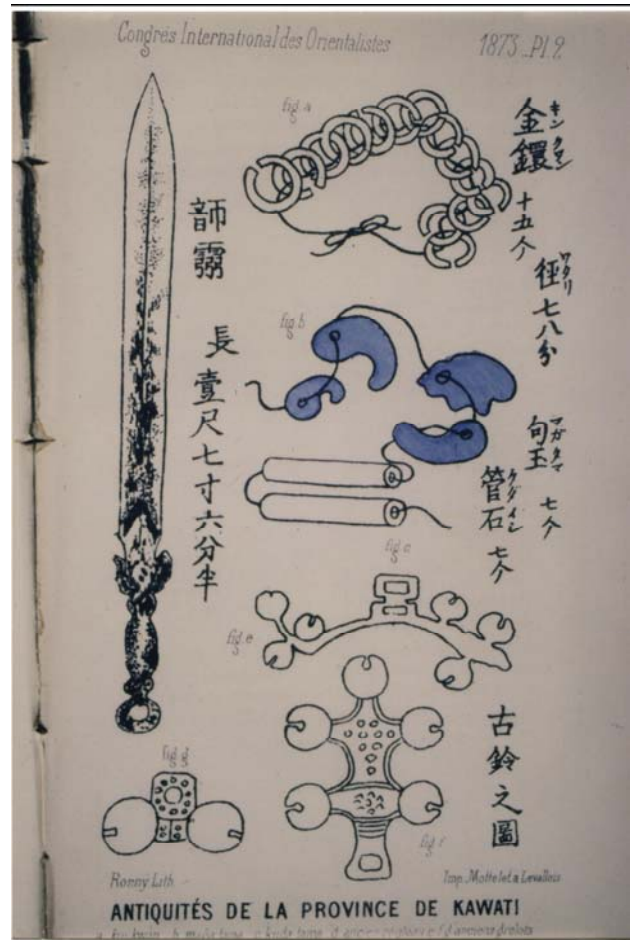
11. 日本橋魚市（『江戸名所図会』巻之一）

11. *Edo meisho zue*



12. 千塚（『河内名所図会』巻之五）

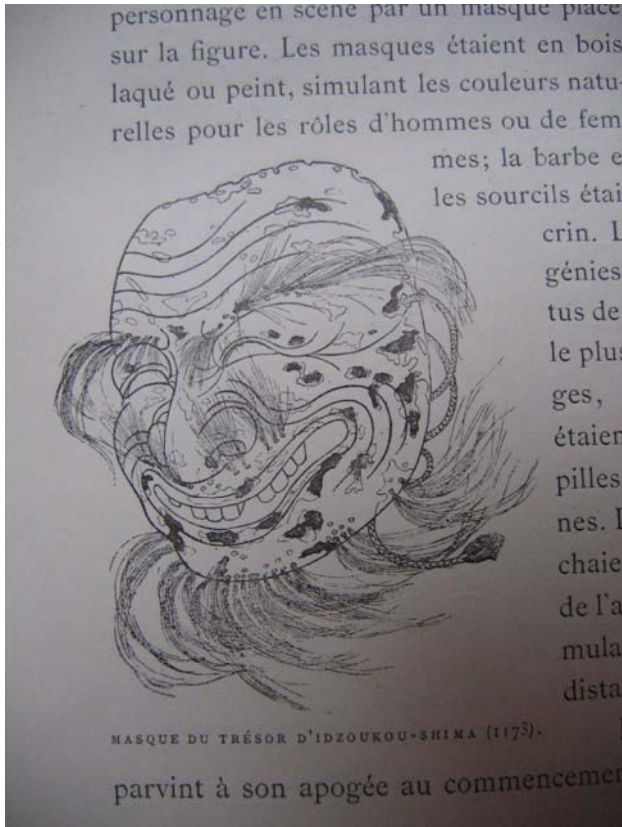
12. *Kawachi meisho zue*. t. 5. *Senzuka*. Texte ponctué  
(par Léon de Rosny ?)



13. 日本文化のより古い記念碑において（国際東洋学者会議、第一セッション、パリ、1873 年）

13. « Sur les plus anciens monuments de la civilisation japonaise », *Congrès international des Orientalistes : compte-rendu de la première session. Paris, 1873*. Paris, Maisonneuve, 1874, pl. 2.





14. 蔵島の宝物の仮面（ルイ・ゴンズ『日本美術』2巻77頁）

14. GONSE (Louis), *L'art japonais*, Paris, A. Quantin, 1883, vol. 2, p. 77 (la sculpture):  
« masque du trésor d'Idzoukou-shima »



16. 庭園での茶会—版画『江戸名所』より—（ルイ・ゴンズ『日本美術』2巻251頁）

16. GONSE (Louis), *L'art japonais*, Paris, A. Quantin, 1883, vol. 2, p. 251 (la céramique): « réunion de thé dans un jardin (gravure tirée du « Yédo Meisho »)



17. 高台寺 萩の花（『拾遺都名所図会』（天明七）巻の二）

17. *Shûi Miyako meisho zue* (1787)



15. 二ノ舞（『蔵島図会』巻之六）

15. *Itsukushima zue* t. 6



18. 日本の考古学者-版画『江戸名所』より- (ルイ・ゴンズ『日本美術』2 巻 155 頁)

18. GONSE (Louis), *L'art japonais*, Paris, A. Quantin, 1883, vol. 1, p. 155 (la peinture): « archéologues japonais (d'après une gravure du « Yédo Meisho ») »



19. 葛西六郎墳墓 (『江戸名所図会』巻之七)

19. *Edo meisho zue t. 7*



20. 祇園会 (『拾遺都名所図会』(天明七)巻の一)

20. *Shûi Miyako meisho zue* (1787)

[Musée Guimet ancien fonds japonais 11778]